

## キタ 再発見の会



大阪キタのエリアは従来より交通やショッピングの拠点ということで「訪れる」まちの色合いが強いエリアですが、近年オフィスワーカーやお住まいの方、学生の方も増えており、「働く」、「住む」、「学ぶ」まちの色合いも徐々に濃くなっています。キタエリアで多くの時間を過ごされる方に、是非キタエリアの豊富な魅力を知っていただき、もっと好きになっていただくきっかけとして、この度連続講座「キタ再発見の会」を開催します。近年、まちの機能として職場や学校、自宅以外の「サードプレイス」が必要といわれております。「キタ再発見の会」はキタエリアのサードプレイスになることを目指しています。皆様に気軽に立ち寄っていただき、夜のひとときにゲストトークや意見交換を愉しんでいただければ幸いです。

### 第6回キタ再発見の会

□テーマ 『古地図で愉しむ「大阪くらしの今昔館」』  
 □講師 株式会社 竹中工務店 大阪本店 技術担当顧問  
 酒井裕一様(大阪くらしの今昔館ミュージアムボランティア町家衆)  
 □日時 2018年5月17日(木) 18:30-20:30  
 □会場 都市活力研究所セミナールーム  
 今回のゲストは、大阪市役所を退職後、企業に勤める傍ら、大阪くらしの今昔館のミュージアムボランティア「町家衆」としても活動されている酒井裕一さんです。プラタモリの大ファンで、まち歩きが大好き。時には古地図を片手にまち歩き案内人も務めておられます。住まいと暮らしに関する日本初の専門博物館である今昔館の見どころを発信するブログ「今週の今昔館」を継続中。ご自身の趣味である古地図を題材に、今昔館の魅力と大阪のまちの地理・歴史・文化の一端を語っていただきます。



私は大阪市役所を退職した後竹中工務店に勤めておりますが、休日には大阪くらしの今昔館でボランティアをしています。今日は大阪くらしの今昔館のお話をさせていただきますが、趣味で古地図を見ながら街歩きをしているので、古地図もたくさんご紹介させていただきます。自己紹介ですが、大阪生まれの大阪育ち、大阪が大好きな人間で、京都の大学で建築の勉強をして卒業後に大阪市役所に就職しました。市役所では都市整備局などに勤務して最後は住まい公社で3年間勤め、定年退職しました。HOPEゾーン事業で地域の人たちと一緒に魅力を掘り起こしていくという事業をしているときに古地図で前もって昔どうだったかということ調べていました。また、都市住宅史という本を出版する企画がありましたが、その延長線として大阪くらしの今昔館をつくってみてもらうということにつながったと思っています。

今日のお話ですけれども、大阪くらしの今昔館とは何か、展示内容と特徴をご紹介します。後半では今昔館の展示を古地図で楽しんだり、今昔館にある古地図で大阪の街を楽しんだりしてみたいと思います。

まず、大阪くらしの今昔館とは、  
 ○「住まいの歴史と文化」をテーマとした日本初の専門博物館  
 ○高度な学術性を踏まえ、市民の目線に立って歴史を読み解く  
 ○見せる展示を超えた、体感する展示  
 ○「住まいと暮らし」の情報交流拠点として集客型ミュージアムをめざす(「アミュージアム」へ)。

ということで、住まい情報センターの一環として展示機能を担う施設という位置づけになっており、大阪のまちに住む魅力を情報発信するねらいの施設です。他の博物館のほとんどが教育委員会の所管している社会教育施設ですけれどもこちらのミュージアムは住宅政策を担当する都市整備局が所管しているというのがちょっと珍しい点だと思います。また展示の設計と建物の設計を同時進行でやりましたので、例えば9階の町家のなかに火の見櫓が建っていますが、これが収まるようにドーム型の天井にして収まるようにしているとか、大阪のまちのどこを使うのが展示が一番いいかということフィードバックしながら設計が進んだということが特徴だと思います。平成13年(2001年)4月26日に開館しました。なぜ住宅政策の一環でこんな展示施設をつくっているのかというのは、当時は大阪市の人口が減り続けていた時代でした。特に25歳から40歳ぐらいのところ非常にたくさん減っているというのが当時の課題でした。1つは結婚するときに親元から離れて郊外に出ていく。また子供が出来てもっと広い住宅に住みたいというときに外へ出ていく。そういった2つのパターンでたくさんの方が出ていく時代でしたので、それに対して住宅政策の充実も必要ですけれども大阪のまちの魅力を知ってもらうことが非常に大事じゃないかということ考えてものです。

展示内容の特徴ですが、9階の展示室は「なにわ町家の歳時記」ということで9月から4月までの商家のにぎわいと、今行かれたら夏祭りの飾りということで天神祭の飾りをしています。このように年2回大き

く模様替えをします。それから季節の設えということで、季節ごとの様子がきめ細かく変化します。また、1日の変化を音と光で演出し、45分間で1日を体験してもらいます。8階の展示室は「大大阪パノラマ遊覧」ということで文明開化以降の大阪の主な住宅地や暮らしの様子を資料で展示しています。常設展と別に企画展も年間5回開催しています。またイベントワークショップを頻りに開催してリピーターの確保にも努めています。その結果入館者数は開館当初からずっと15万人~20万人程度でしたが昨年度は年間58万人の方に来ていただきまして6割程度が外国人です。外国人にとっての魅力の1つが着物体験です。30分500円ですが毎日300枚のチケットが完売しています。また小学生の体験学習、団体見学ということで、年間310校2万4千人の方に来ていただいています。また9階では桂米朝師匠、8階では八千草薫さんの声が聞けるというのも魅力になっています。またボランティア町家衆の活動も1つの魅力ではないかと思えます。

実物の町家を再現するときにどんなかたちで再現するのがいいのかということが建設時の大きな課題でした。できれば関西の文化が江戸よりも中心的だった元禄時代が再現出来ればよかったのですが、なかなか元禄時代にどんな建物が建っていたかという資料が残っていないので、天保年間の住宅を再現しようということになりました。どのあたりのまちを再現するのかということでは、大阪の一番中心であり大阪城と港との間にある船場を設定しようということになりました。船場は東西を中心にまちが形成されていますが、通り(8m)を中心に筋(6m)がサブのストリートになっているという船場のまちを設定しました。まちなかで筋を歩いていると背割りのところでまちが変わるので違う住居表示が並んでいるのが大阪では至る所で見られますが、これはなかなか他都市にはない事例かと思えます。お城に近いほうから1丁目、2丁目、3丁目、4丁目というふうに丁目がついています。何丁目と聞いただけでだいたいどの辺かというのが分かるということです。通りを挟んで北と南で1つのまちをつくる両側町というつくりになっています。コミュニティのことを考えれば向かいと同じまちというのはすごく合理的なつく



り方だと思えます。東横堀川がもともと大阪城の外堀だったので、その東側は城内側ということで内がつく地名が結構あります（内平野、内淡路、内久宝寺など）。博物館で再現できるのは面積的な制限があるので前のページの緑の部分を再現しています。

また 8 階に船場の模型を展示して道修町から平野町にかけての堺筋のあたりをモデルにしています。8 階のほうはパノラマ遊覧ということでもなんかにパノラマ地図があってまわりを模型が囲んでいます。模型は川口の居留地、北船場、大大阪新開地（長屋の住宅）、空堀通り、城北バス住宅、古市団地ということです。最後の 3 つについては場面転換をして住まい劇場というつくりになっています。すまい劇場は普段は住宅地の模型ですが場面転換で 1 軒分の家の中を詳しく紹介しています。空堀通りの理髪店、バス住宅の住まい、古市団地を「悦子さん」が順番に引っ越していくという住まいの劇場ということになっていて、このナレーションを八千草薫さんが務めておられます。そのほかに心齋橋筋商店街、天神祭、通天閣・ルナパークといった模型の展示もあります。

次は、今昔館の展示を見る際に古地図の情報を加えてさらに理解を深めて楽しもうというお話です。まず造幣寮です。はじめは江戸時代の状況を示した錦絵になっていて、からくりで動いて最後は文明開化の後の様子になるという展示になっています。その場所の江戸時代というのは川崎という地名で御蔵があることと、東照宮が大阪にもあったということが浪華名所獨案内に描かれています。その蔵の裏側には与力の屋敷がありました。このあたりが今造幣局が建っている場所です。パノラマ地図で見ると桜並木が描いてあって淀川沿いに造幣局が出来ているという様子が鳥瞰図で分かりやすく描かれています。

次に梅田ステーション（初代大阪駅）です。ステーションを日本語化したような、もじったような名前ですが初代の大阪駅です。江戸時代は墓があって空き地のあたりが大阪駅になるところです。明治 15 年ぐらいの地図では梅田ステーションと書いていますが神戸行の鉄道と西京行（東京ができたから京都のことを西京と当時いっていたようです）の鉄道の絵が描かれています。ただ注意していただきたいのは、今の大阪駅はもうちょっと東です。内務省の大阪実測図は非常に精密な図で、市街化しているところと農地だったところが一目瞭然と分かりますが、そのなかにボツと大阪駅ができた様子がわかります。

天神祭の話に移ります。船渡御を描いた巻物をもとに模型をつくっています。お迎え人形をお迎え船の上に載せて神様をお迎えに行き御旅所までお連れするというのが船渡御です。現在大阪くらしの今昔館では坂田の金時の人形を 9 階で見ることが出来ます。天満宮と鉾流し神事を行うところ、御旅所は川口にあったというのが江戸時代の地図に描かれています。パノラマ地図では鉾流し橋のところに鳥居が描かれていて石段も描かれています。これは水位が変わっても水に近づける雁木（がんぎ）という仕掛けになっています。

ここからは今昔館の古地図で街を楽しもうというお話です。今昔館にある地図というとなまず一番目立つのは大阪市パノラマ地図が代表格だと思います。元の地図を 36 倍ぐらいに拡大していますが、それでも字がちゃんと読めるという精密な作図がされています。この地図を見ながら現在の街を歩いてみたら、昔はこんなものがあったんだということが実感できる面白い地図だと思います。もう 1 つ展示しているのは浪華名所獨案内のパネルで、9 階の江戸時代のフロアの入り口に置いてあり、中で見てもう江戸時代の街並みと同じ時代の大阪のまちの様子がわかります。大坂城がある東が上になっています。当時は大阪に港から入ってくるが多かったので生駒山などを後ろに見て手前にまちがあるというかたちです。この地図のおもしろいのはモデル観光ルートが描かれています。名所案内として 3 本の線が引かれていて、それぞれ 1 日コースになっています。宿屋さんでこういうのを配ってもう 1 泊泊してもらおうという狙いがあったのかもかもしれません。

さて問題です。先ほどの船渡御のところにも登場していましたがけれども控訴院が描かれています。昔は何があったか、思い浮かべてみてください。今は簡単ですね。高等裁判所、地方裁判所、簡易裁判所があります。江戸時代はどうだったかということ、堂島に米市場がありました。堂島の近くには各藩の蔵屋敷がたくさん建っていました。控訴院の場所は古地図に鍋島と書いてあるように佐賀藩、鍋島家の蔵屋敷がありました。堂島というのは今は地名だけ島ですけれども昔は本当に島でした。北側を流れていた蜷川（曾根崎川とも呼ばれる）が明治 42 年のキタの大火のあとにがれきで埋められてしまったので今は川はなくなっています。堂島から蜷川を挟んで向かい側の鍋島藩のところが控訴院になって

います。蔵屋敷の中には舟入があって、運んできた米をそのまま中で運び込んでここで干したりして蔵にしまうということが一貫してできるのが蔵屋敷です。蔵屋敷というと特に西日本の各藩からすると参勤交代で江戸に行き来しますからその途中に必ず大阪に寄るということで、大名屋敷が江戸と同じように大阪にも置かれていたということによって立派な屋敷があったという様子を再現した絵図です。初代から二代目、三代目ということでも控訴院が建て替わっていきましたが、三代目の様子が先ほどのパノラマ地図に描かれています。

今昔マップ 3 という埼玉大学の地理学の先生が公開されているソフトを使って 4 枚の地図を比較すると敷地は江戸時代のままという様子が良くわかるかと思えます。この蔵屋敷のあとに控訴院の建物が建っています。この地図では豊国神社がもともと中之島の突端にありましたが公会堂を建てる時に移ってくださいということで市役所の東側に神社が移っています。また市役所が増築するときに大阪城のほうに神社に移っていただいているということで、神社が場所を変えている様子もこの 4 枚の地図を見比べることで分かります。

さて堂島の変遷を見ていきたいのですが、堂島はすごく大きい島です。ここではパノラマ地図で大阪商工会議所があったところに焦点を絞りたいと思います。国鉄のガード下を抜ける梅田入堀という水路があって出入橋があります。阪神電車が開通した時はここが終点でした。さてこの場所は今何になっているかと思えますか。また江戸時代には何があったでしょうか。江戸時代の地図には大村とか足守、宮津、三ヶ日、久留米、丸岡と 6 つの藩の名前が書かれており、蔵屋敷群があった様子が分かります。明治 15 年の地図を見ると五代氏藍製工場という表記がありまして、五代友厚朝陽館が建っていたところです。五代さんゆかりの地ということで街歩きでも割とよく取り上げられています。その後の様子ですけれども商品陳列場になったり大阪府立商業学校が来たり商業会議所、今の商工会議所ですね。これも五代さんが初代会頭ですからゆかりの施設です。さてここで大変化ですね、明治 42 年のキタの大火でこの一帯が丸焼けになりましたが、会議所は無事に残ったようです。大正 3 年の地図を見るとここに市役所がありました。このあと市庁舎は中之島に移りますがここに大阪市役所堂島庁舎跡という石碑が今立っています。昭和 10 年にまた大きく変わります。北のほうには中央電話局、福島電話局、左下の方に中央電信局、右下が商工会議所ということで、商工会議所の周りが電信電話関係の施設に変わっています。電信電話は当時のニューメディアです。新しく入ってきたものの拠点をここに作ったという様子が良くわかるかと思えます。その後昭和 28 年ごろの地図によるとその西側の土地に阪大病院、こちら側の土地に阪大微生物研究所と書いてあって、この場所にそういう施設もあったというのが非常におもしろいと思いました。今は NTT テレパークになっていて 4 つの大きな建物が建っています。

さて、最後です。今日は大阪くらしの今昔館の話ですので最後は今昔館に戻ってきました。市民館と書いているところの跡に、隣にあった住友銀行と敷地を一体利用して大阪くらしの今昔館の建物が建っています。昔はどうだったのかという商店街が途切れたところに葎原墓地というお墓があった様子が分かります。昭和 11 年の地図によると、天六交差点の所には新京阪電車のターミナル駅の上に京阪デパートが建っていました。また、天六から野田まで阪神電車が路面電車として走っていました。また大阪市電が天六の交差点を東西と南北に走っています。北市民館の写真には葎が絡まっている様子が写っています。ここが現在は住まい情報センターと大阪くらしの今昔館になっています。

【参考】インターネットで入手できる地図情報  
《便利なサイト》

[今昔マップ](#)

[地理院地図](#)

[Stroly \(旧ちずぶらり部\)](#)

[国際日本文化研究センター \(日文研\)](#)

[ラムゼイ・コレクション](#)

[大阪市立図書館デジタルアーカイブ](#)

[大阪府立図書館おおさか e コレクション](#)

《スマートフォン用のアプリ》

[ちずぶらり](#)

[大阪ちずぶらり](#)